

## ■ 上 ギ ャ ラ リ ー ト ー ク ■

# ミュシャ財団秘蔵 ミュシャ展

— プラハからパリへ 華麗なるアール・ヌーヴォーの誕生 —

会期 11月3日(水祝) ▶ 12月12日(日)

19世紀末から20世紀初頭のアール・ヌーヴォー時代の頂点を極めた画家・装飾芸術家であるアルフォンス・ミュシャは、1860年7月24日チェコスロヴァキアの南モラヴィア地方、イヴァンチツェに生まれました。当時のチェコは、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の支配下にあり、その弾圧に耐えながらミュシャは独立心の旺盛な熱烈な愛国者として成長しました。

芸術家としてのミュシャの経歴は比較的遅くに始まりました。21歳の時、ウィーンの舞台装置をつくる工場の助手となり、その後ミュンヘン美術学校を経て、1888年にはパリのアカデミー・ジュリアンやアカデミー・コラロッシで学びました。歴史画家としての修行を積んでいたわけですが、なかなか歴史画で成功できなかったミュシャは生活の糧を得るため、やむなく雑誌の挿絵を手がけるようになりました。

そうして迎える伝説の1894年、演劇界の「聖なる怪物」サラ・ベルナルの依頼で制作したポスター《ジスモンダ》で、ミュシャはパリ中の評判を呼び、一躍有名になりました。

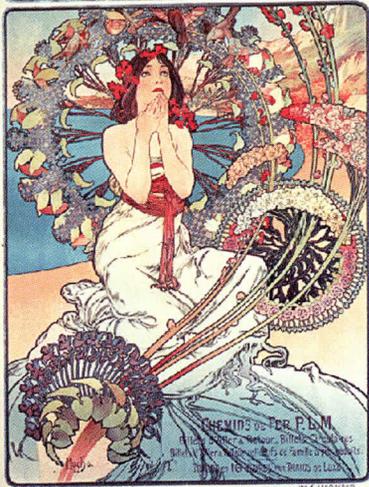
当時のポスター界は、新しいリトグラフの技術が導入され、ポスターを芸術の域まで高めようとする革新的な活動がさかんでした。ミュシャはこの《ジスモンダ》で「ミュシャ・スタイル」と呼ばれる全く新しい装飾芸術の規範を確立させ、グラフィック・アート界に旋風を巻き起こしました。当時主流であった人物の動的ポーズではなく、堂々として威厳のある静的ポーズの採用、文字や衣装にみられるビザンティン風の精巧な装飾の効果、細部まで注意深く仕上げられたデッサン、柔らかい色調、人物の頭部の背後に使われる円形や扇形のモチーフ、縁取りなどに描かれるアラベスク模様など、彼独自の新しいスタイルを確立したのでした。

フランスのとれた華麗な構図による作品《モノコ・モンテカルロ》は、ミュシャの装飾的熟練を見事に証明しており、花々のつる状の曲線としなやかに繊細な長い描線の特徴としています。これはP.L.M.鉄道会社の依頼によるポスターで、大きな円を描いて曲がるライラックと紫陽花の花輪と茎は、モンテ・カルロに通じる鉄道の線路や車輪を表し、それらに囲まれた夢見るような少女は春の化身だといわれています。1900年にパリ万国博覧会が開催され、ミュシャ自身も出



▲《ボヘミアの唄》1930年頃  
油彩・カンヴァス © Mucha Trust 2004

### MONACO-MONTE-CARLO



▲《モノコ・モンテカルロ》のポスター 1897年  
リトグラフ © Mucha Trust 2004

品したアール・ヌーヴォー様式は大成功を収めました。しかしミュシャは、同博覧会のボスニア・ヘルツェゴビナ館のデザインを依頼されたことがきっかけで、自身のなかに潜む愛国主義に自覚め、40歳にして進むべき道をグラフィック・アートではなく絵画に見出し、「人生の後半を祖国とスラヴ民族のために捧げる」ことを決意しました。スラヴ民族の文化を世に知らしめ、スラヴの団結を促進するための歴史画20点からなる大作《スラヴ叙事詩》を構想し、1928年の完成までに18年の歳月を要しました。悲しいかな、長い年月の間にこの作品の意図や目的は時代の感性に調和しなくなり、時代遅れの作品と感じられたようです。しかしながら、自分の作品がどう評価されようとも「自分なりの方法でやったまで」と答え、画家としての使命をミュシャは遂行したのでした。

代表的なポスターはもちろん、油彩、彫刻、ジュエリー、写真など、多方面の分野で活躍したミュシャの全貌に迫る今回の展覧会、ぜひお見逃しなく！

### お知らせ

civi(シヴィ)によるギャラリートークは、「ミュシャ展」会期中の毎週日曜日・祝日、午前11時～午後2時から展示室にて実施しています。



▲『ジスモンダ』のポスター 1894年  
リトグラフ © Mucha Trust 2004

【山内利恵】

■ピノッキオの世界展 ギャラリートークを終えて  
[4・9-5・9]

やんちゃで、失敗を繰り返しながら成長していくピノッキオのことは、子供も大人もよく知っているお話だと思います。だから、親子連れの人が多いのでは？と思っていたのですが、意外と年配の方たちの来館も多く、それぞれのピノッキオに対する知識や思い出などを、合間合間に話され、私も教わる事が多く、楽しいギャラリートークとなりました。それと、私は今回の展覧会に合わせて、『ピノッキオの冒険』の原作を読んだのですが、子供達がワクワクしながら読めるように書かれていながら、全てが創作されたファンタジーではなく、当時の暗い現実を、所々に風刺を込めて書き込んであって、奥深い物語なのだという事を知りました。また、『ピノッキオの冒険』には、童話を通じて、将来を担う子供達に、立派な人間になって欲しいと言う、原作者のコッローディの強い期待が込められていて、そのようなお話だからこそ、120年もの間、読み継がれ、愛され続けてきたんだと納得できた展覧会でした。

[横井真由美]



■新しい仲間を迎えて  
[5・29]

3度目となる今回の募集で8名の新たな仲間が加わり、シヴィは全員で33名となりました。最近では、従来からのギャラリートークや「しびのーと」の編集のほか、ワークショップのアシスタントなど、シヴィの活躍の幅は広がっています。このたびの増員はそれに対応したものです。今回加わったメンバーも個性派ぞろい！これからの活躍に請うご期待！

[高松市美術館学芸員 牧野裕二]

■「アートで遊ぼう！」のアシスタントをして  
5・22 おもちゃでアートをつくっちゃえ！

参加した子供達は「わざの美」展開催前のまだ作品が展示されていない展示室に入り、学芸員さんからレディ・メイドの作品(既製品を利用した作品)について話を聞きました。スライドでそれらの作品を見た後は、さっそくおもちゃを使ってアートすることに。

各自おもちゃを3個ずつ選び、本番ながら彫刻台に並べ題名とせりふをつけて発表。作品はひとつづついいいにスポットライトをあててもらい、本格的です。発表は恥ずかしがる子が多かったけれど、どの子も題名やせりふはなるほどナーと思わせるものがありました。

6・12 模様を探そう

次は「わざの美」展の開催中、子供達は展示作品の表面の模様注目、好きな模様をスケッチし、それを色画用紙に写して最後に折り紙にして作品にしました。折った時に描いた模様が表に出るようになるのは大変そうでしたが、ちゃんと飛行機の翼やかぶと、鶴

の上で模様になっていました。展示されている作品は完成されたものとして鑑賞して終わり、になりますが、視点を変えてみることで子供達は自分の好きなものを見つけ出したり何か作る時のヒントにしたりして楽しんだようです。

[三好ひさこ]

■「子どものアトリエVol.3」(講師:杉本公和)のアシスタントをして  
[5・30、6・20]

子供の頃、図工は好きでした。ただ、いつも作品が仕上がるのが、最後でした。周りの友達には既に、素敵な作品を作り上げています。けれど、私のは、まだ作品と呼べるものではありません...

いました！私と同じタイプの子。作品作りの早い子や人の何倍も作品を作る子もいます。作る過程も、作品も個性的です。

今回の「子供のアトリエ」のテーマは《おもしろく変化する絵本》。様々な素敵な絵本ができました。時間の変化が表現されていたり、ページをめくると、動物が思いもよらないものに変身していたり。子供たちはそこまで計算しているのかしら？と、感心させられます。作品の披露の仕方もまた、個性的でした。

みんなに共通して言えるのは、創るのが好きということ。創るのが好きな仲間と刺激しあえる環境で、私自身も子供たちから良い刺激をもらっています。これから多くの作品を観て、感じて、想像して、表現して、楽しい作品を見せてくれることを期待しています。

[森糸えり子]

「子どものアトリエ」の《ふしぎな形のあやつり人形を誕生させよう》参加者作品



主な活動

2004年

- 4・9~5・9 「ピノッキオの世界展」ギャラリートーク  
(会期中毎日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ18回、参加者数のべ409名)
- 4・22 「ピノッキオの世界展」団体鑑賞ギャラリートーク  
(高松高校42名)
- 4・30 「ピノッキオの世界展」団体鑑賞ギャラリートーク  
(松島小学校131人、学芸員とともに)
- 5・22 アートで遊ぼう！②  
アシスタント(新メンバー養成)
- 5・28~6・27 「日本伝統工芸展50周年記念展 わざの美」ギャラリートーク(会期中毎日曜日、午前、開催回数のべ5回、参加者数のべ186名)
- 5・29 新メンバーとの初顔合わせ
- 5・30 子どものアトリエ③  
アシスタント(新メンバー養成)
- 6・12 アートで遊ぼう！③  
アシスタント(新メンバー養成)
- 6・20 子どものアトリエ④  
アシスタント(新メンバー養成)
- 6・20 高知県立坂本龍馬記念館カルチャーサポーターと交流会
- 7・23~8・29 「アンテスとカチーナ人形展」ギャラリートーク(会期中毎日曜・祝日、各日午前・午後、開催回数のべ11回、参加者数のべ189名)
- 7・26 香小研高松支部図画工作部会 夏季研修会でのギャラリートークとアートプログラム(学芸員とともに)
- 8・1 「アンテスとカチーナ人形展」アートで遊ぼう！番外編の企画原案・当日担当
- 8・18 小学校教科別研修会(図画工作)研修会でのギャラリートークとアートプログラム(学芸員とともに)
- 9・4 「フェルメール「画家のアトリエ」栄光のオランダフランドル絵画展」(神戸市立博物館)鑑賞研修鑑賞/講演会:岡泰正学芸係長

美術「館」への橋渡し

夏休みは、学校行事による子どもたちの団体鑑賞は少ないものの、最近では「鑑賞教育」への興味関心によるものでしょうか、教師の研修の場として美術館が使われるようになり、今年度は「香小研高松支部図画工作部会」「小学校教科別研修会(香小研高松支部図画工作部会)(美術)」と延べ190名の子・中学校の先生方に、特別展「アンテスとカチーナ人形展」(2004・7・23~8・29)を中心とした美術館プログラムを体験してもらえました。これは児童生徒たちの美術館アプローチをより拡充したいと願う私たちにとって、何よりものチャンスに思えました。

能動的に作品に関わり、美術館がそうした可能性の場であることを実感してもらいたいと考え、美術館ボランティアのメンバーの協力も得て行った一連のプログラムは次のとおり。展覧会場では、雨を切望する北米のプエブロ・インディアン(特にホビ族)がカチーナ人形に施した雨・雲・稲妻・虹・太陽といったアイテムの形を、グループに分かれて探してもらったことにより、約70体の人形を自ら目で見てもらいました。そして、これら人形のコレクターである現代ドイツの巨匠ホルスト・アンテスが、ホビの人々の宇宙観にどんな影響を受けたのかを第2会場に展示されたアンテス作品を前に考えてもらいました。また常設展「美術のフロア(植物)(2004・4・5・28~8・15)」では、各チームがそれぞれチョイスした作品の当てっこゲームを展開し、「見ることを通して遊ぶことも経験してもらいました。そして、美術館のバックヤード紹介では、探検気分を味わいつつも美術館の施設や役割を自ずと知ってもらうことになったように思われます。

常にプログラムは批評の対象となるもので、果たしてその後先生方と意見交換し、育普及の財産になったことはいまのところありません。すべての段階の子どもたちに美術館や美術が必要なものかどうかは分かりません。しかし、子どもたちが自分の意志で、美術館を訪れることが稀である現実の中、美術館あるいは美術というものが、世界観を広げる「場」になることもあれば、



▲ 作品の当てっこゲームに熱中する先生方

常にはプログラムは批評の対象となるもので、果たしてその後先生方と意見交換し、育普及の財産になったことはいまのところありません。すべての段階の子どもたちに美術館や美術が必要なものかどうかは分かりません。しかし、子どもたちが自分の意志で、美術館を訪れることが稀である現実の中、美術館あるいは美術というものが、世界観を広げる「場」になることもあれば、

# 高松市美術館コレクション

## 田中敦子 《電気服》 1996年

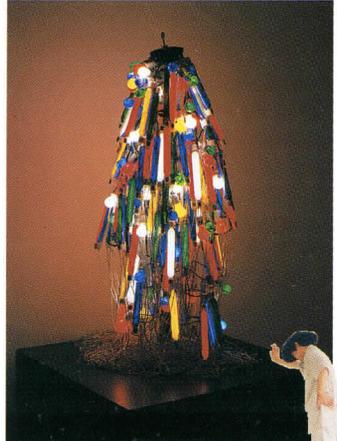
エナメル・電球・コード／100(C)×165(C)cm／高松市美術館蔵

この作品は当館所蔵作品のNo.1です。さて、何のNo.1でしょうか？値段？大きさ？それとも奇抜さ？ 答えは、貸出回数。他館の展覧会に貸し出した回数が「No.1」なのです。

1988年に当館所蔵になって以来、貸出回数はすでに10回。他にも多くの作品に対して貸し出し依頼がありますが、なかでも電気服の人気はダントツです。

この電気服、実は1986年に再制作されたもので、オリジナルはそれより30年前(作者24歳の頃)に作られました。1954年に関西で結成された前衛美術グループ「具体」に所属していた田中さんは、舞台を使った美術で変化する服をつくりたいと考えていました。たまたま大阪駅のベンチに座っていた、葉の広告がネオンの服にされたそのまばゆさに「ネオンの服を作ろう」と思いついたそうです。

それから試行錯誤の末1年かかってやっと完成。まだその時には題名はなく「点滅する電球で作った「衣服」と称する作品」と紹介されただけで、特に注目もされませんでした。その後舞台での発表で大きな注目を集めたもの、まもなく解体され別の作品になっ



▲撮影：◎加藤成文



てしまいました。

時代は流れ1980年代に海外から、日本の前衛美術に対する関心が高まり電気服もよみがえりました。当時と違って今度はコンピュータを使い1ヶ月と言う短期間で出来上がりました。この電気服、84個の丸球、97本の管球、おびただしい数のコード等からなるいたってシンプルな作りです。長い貸出の間には電球が切れて戻ってくる事もあったとか：「管球は現在では日本では手にはいらず、フランスから取り寄せているそうです。」

田中さんは、代表作である電気服について「高松市美術館にコレクションとして入った途端パリに2回、ドイツ、イタリア、アメリカと貸出して下さったと語っています。世界的になった」と語っています。現在(2004年8月)2005年5月もアメリカ、カナダに新に11回目の旅に出ているところです。また元気の姿で戻って来てほしいものです。

「吉田光子」

# 突撃アートの晩ごはん

7

今回のメニューは、ポップ・アートのスーパースター、アンディ・ウォーホルが描いた、世界で一番有名な(?) スープです。

1900年のバリ万博で受賞した金のメダリオンをパッケージに配したキャンベルスープは、アメリカの人達にとっては、子供の頃から見慣れた、誰もが知っているスープです。

ある時、美術家のアンディ・ウォーホルは、アメリカ社会の大量生産・大量消費の象徴でもあるキャンベル・スープの缶詰を、スーパーマーケットで何種類も買い込み、何

の工夫もなく、そのまま忠実に写し描き、作品として提示しました。アートの革命と言われた「キャンベルスープ」シリーズの誕生です。

「私の好きな時に話を聞いて、話をしてくれること、日本製のテープレコーダーを妻」と呼び、僕は、機械になりたかった。人間が皆そっくりだったら、どんなに素晴らしい事か」という名言を残したウォーホル。やがて彼の制作手法は、初期の手描きから、より機械的で没個性的なシルクスクリーンへと移行します。天井や壁をアルミホイルで覆い、一面銀色の空間となったアトリエを「ファクトリー(工場)」と呼び、そこに集まって来た若者達と、工場の流れ作



業のように、美術作品を大量生産していったのです。それは、これまでのアートにおけるオリジナルの重要性を一挙に吹き飛ばす衝撃的な出来事でした。

1962年にロサンゼルスで開いた初めての作品展、出品作品はもちろんスープ缶。当時発売されていた全種類のスープを描いた(32個のキャンベル・スープ缶)です。壁面に棚を作り、スーパーマーケットの棚のように、32点の作品をずらりと並べて展示

近くの画廊では、これを皮肉って、実際にスーパーマーケットで買ったキャンベル・スープ缶を大量に並べ、当店の格安3個で60セント)のポスターを出したそうです。その後、ウォーホルはスープ缶を題材に多くの作品を生み出しています。「なぜ、キャンベルスープなの?」との問いに、「大好物で毎日食べていたから」と

答えたとか。

ここまで書いて来ると、お腹の虫もそろそろ...。ところで、今宵の晩ごはん、何になさいますか。やはり、キャンベル・スープでしょうか。トマトスープ、オニオンスープ、チキン・ンドルスープ...。さて、貴方は、どの缶を開けますか?

「山上昭代」

表現する選択肢のひとつになりうることもあると、学校や子どもたちにアプローチし続けることが必要だと考えます。子どもたちが成長していく過程において、いつか美術「館」のことが思い出され、足を運んでくれることになればと望みます。鑑賞のあり方はさまざまです。作品の解釈も幾重にも開かれています。「こんな場所もあった」「あんな楽しみ方もあるよね」と心の片隅にとどめておけるようなプログラムが提供できていれば、彼らが美術を必要としたその時に、美術との受身ではない各々の関係が生まれてくることでしょう。

さて、昨年来、「鑑賞教育における学校と美術館との連携」という種が、高松市美術館という土壌にポツポツと時がけられているわけですが、今夏研修会という形で芽が出てきたことがとても喜ばしく思われます。この会は、特別展ごとに高松市内を中心とした小・中学校に呼びかけられ、「美術館では、学校を対象にこんなことができるよ!」というデモンストレーションを行い、参加くださった先生方とそのプログラムを巡って交流を深めるといった地味な作業の積み重ねです。そこには美術を触媒に共鳴できる先生と学芸員による確かなつながりという実が結びつつあります。「高松市美術館に図工や郊外学習等で児童を連れてきたことがあるかどうか」というある会への今年のアングレートの項は、「ある」「ない」「3」「無回答」2という結果でしたが、来年は「ある」とお答えいただける先生が少しでも増えるようさらに連携の輪を広げ深めていきたいと思います。そして、一人でも多くの子どもたちの心に美術館体験が残っていくようなプログラムを、先生方やCiviメンバーとともにつくっていきたく願っています。

「高松市美術館学芸員 毛利直子」



2004年9月19日(日) 中村哲也氏によるワークショップ 「アリスもん〜あなただけのドラえもんを作ろう!」

「THE ドラえもん展」の関連イベントとして、出品作家の中村哲也さんによるワークショップが行われました。中村さんと一緒に、みんな思いの自分だけのドラえもんを制作。右端のスプレーニスを吹き付けているのが中村さん。本物のドラえもん(?)も友情出演。



# 美術館日記

